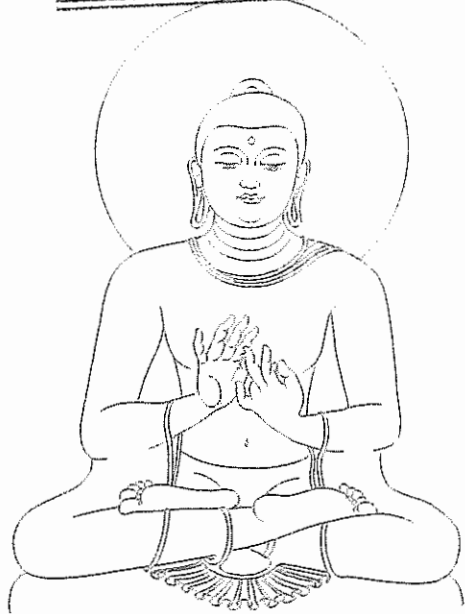


# お釈迦さん・阿彌陀さん・そして

## 私が佛と成る

(No 2)



お釈迦さま説法像（写佛）

6月号で、お釈迦さまは我々と同じ人間として誕生され、29才の時出家、6年間のご修行の後、お覺りを得られ、45年間説法の日々を送られ、80年の生涯を閉じられました。ざっと以上のことを述べました。

今回は、お釈迦さまはシャカ族の王子と云う生い立ちから、欲望の満足と云う観点から見れば、ほぼ満足した生活であったはずですが、それなのに何故、出家されねばならなかったのか？その点を尋ねてみましょう。

結論から先に云うと、佛教は「世間的な欲望の満足を求める」教えではありません。

この点を間違えますと、「佛教」から外れてしまいます。しかし、浄土真宗以外の佛教寺院の多くは、骨董品（国宝とか文化財）の拝観を「参詣者」に勧め、また、無病息災・商売繁盛・入学祈願と云った「現世利益」を、謳いあげ、これが佛教活動と捉えているのは全くの見当違いです。

佛教の教えは、人生の『空しさ』からの解放です。

お釈迦さまは少国とはいえシャカ族の王子です。ですから一般人よりも恵まれておられたはずですが、王子といえども人間です。人間は、老い・病にかかり・死ぬという不条理に対して、『空しさ』を感じられるのは当然です。それが出家の原因でした。

この世でどれほど名誉・地位・財産を得たとしても、老・病・死の前には、すべてが価値を失ってしまうのです。

この「空しさ」は、お釈迦さまだけが感じたものでなく、全人類を貫く空虚感です。突き詰めて考えれば、人間として誕生したということは、死ぬための原因を得たことで、死の根本原因は、生まれたことに起因するのです。

私は以前に、「どうせ死ぬのになぜ生きるのか？」と云う問いを立てて、雑文で問いました。（2018年5月号185号）。

ところがこの問いは、実は、自分が自分に人生の意味を問うていたのではなく、「人生そのものが私に問いを投げかけていたのです」何故なら、自分はどこまで行っても自己中心で、煩悩に満ちあふれた者であり、自分に都合の良いようにしか考えられないのです。答えが出たとしても、それは自分に凝り固まったものに終始するものです。

人生そのものからの問いに答えようとするのが佛教であり、浄土真宗と云う運動です。そのことを、浄土真宗は阿彌陀如来からの呼びかけと受け取られた。阿彌陀さんからの私に向かつての「問いかけ」であると頂くと、人生のあらゆる場面が、すべて阿彌陀さんからの「はたらき」としてさしだされてくるのです。

お釈迦さまの出家の目的から、唐突に「阿彌陀さまのはたらき」が出たもので何のことやら理解に苦しまれると思いますが、今回は、阿彌陀様のはたらきとは、「私を活かしつづけている「いのち」のはたらきをいう」ということにとどめて、来月号で学んでみます。

つづく



北海道の當麻雅己さんと



北摂・唯徳寺ご一行